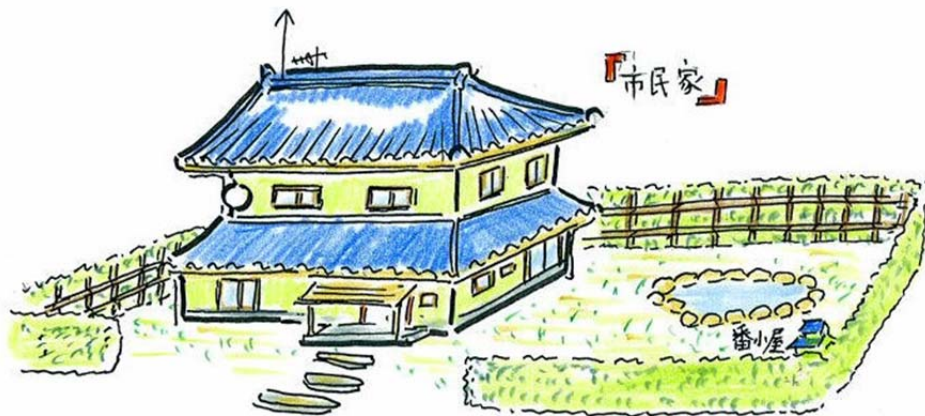


◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

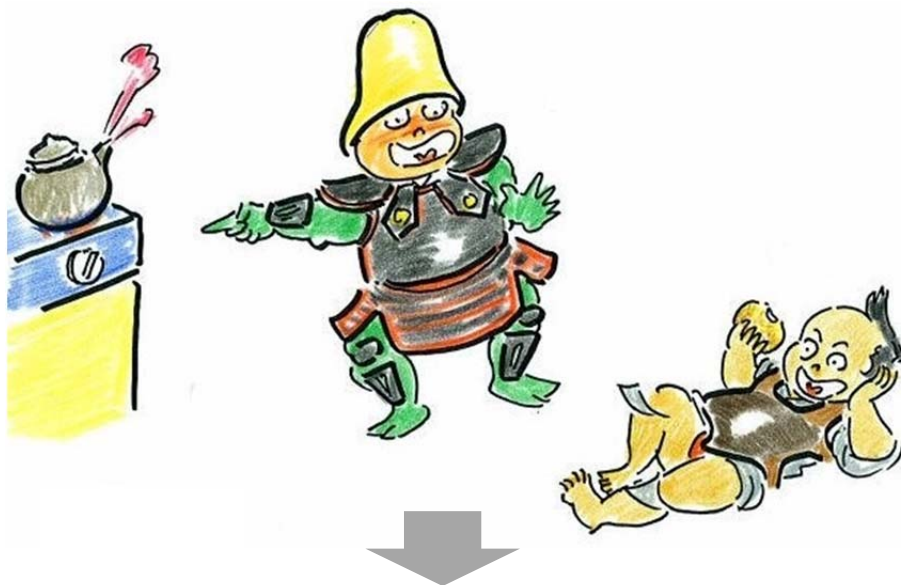
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



仕事は家来の中間 ご助と共に、「市民家」の火災予防の点検を行うことですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事熱心ではないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起こしてしまいます。





そんなご助に手を焼きながら、点検を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き！



援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。

ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの『火災予防奮闘記』

をどうぞご覧ください。

主な登場人物



支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.30

「そおいえば、去年の端午の節句のときは大変でやったねえ旦那様。」と庭の池を覗き込みながらご助が拙者に話しかけてきたのじゃ。

「去年の端午の節句？ああ、お主の屁に湯沸かし器の種火が引火して番小屋が吹き飛んだやつじゃな。」

「な、なに言ってやんです、あっしはタヌキではありやせんぜ！」

「なんじゃタヌキとは？」

「タヌキを知らないんですかい旦那様？」

「タヌキくらい知っておるわい。トランプ遊びのあれじゃろうが！」

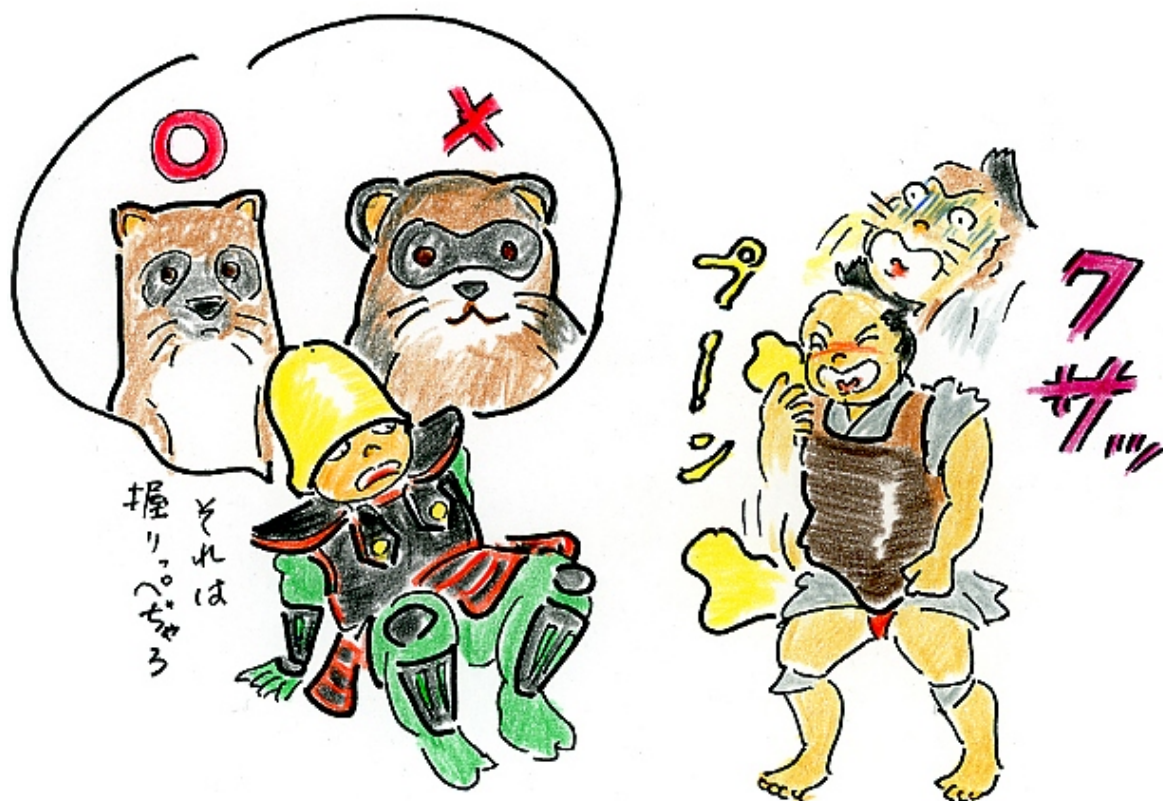
「？？・・・あれはババ抜き。もう先月号から離れてくだせえよ。あっしのはババ抜きじゃなくてタヌキ。それ、タヌキの最後っ屁って言うじゃねえですか。」

「??・・・そりゃあイタチじゃないのかい？」

「イタチ?・・・そ、そうでさイタチイタチ。今日はツイタチってね。」

「誤魔化すでない。タヌキとイタチの区別もつかんとは嘆かわしい。それで

よく最後っ屁などと言えるな。」



「違いますって、最後っ屁じゃなくて、あっしが大変だったのは鯉のぼりのことさ。」

「鯉のぼり? ああ、拙者が作ったあの立派な鯉のぼりのことか。」

「拙者ってのは解^げせねえですぜ。あの鯉のぼりを作るのにあっしも・・・。」

「良いよい、小さなことを気にするでない。大物になれぬぞ。」

「て、てやんでえ、こちとら大物になりたくって・・・。」

「そろそろ本題に入らぬか。もう2ページも使っておるぞ。」

「いえね旦那様、なんで鯉なんですかい？めでたけりゃいいんなら極彩色の金魚なんかの方が良いじゃねえですかい？」

「金魚？金魚じゃダメじゃろ。第一、金魚のぼりなんて弱々しくていかんじゃろ。」

「何ででやす？ひらひらと優雅な姿は見事じゃねえですかい。それに金魚様は弱くないですぜ。」



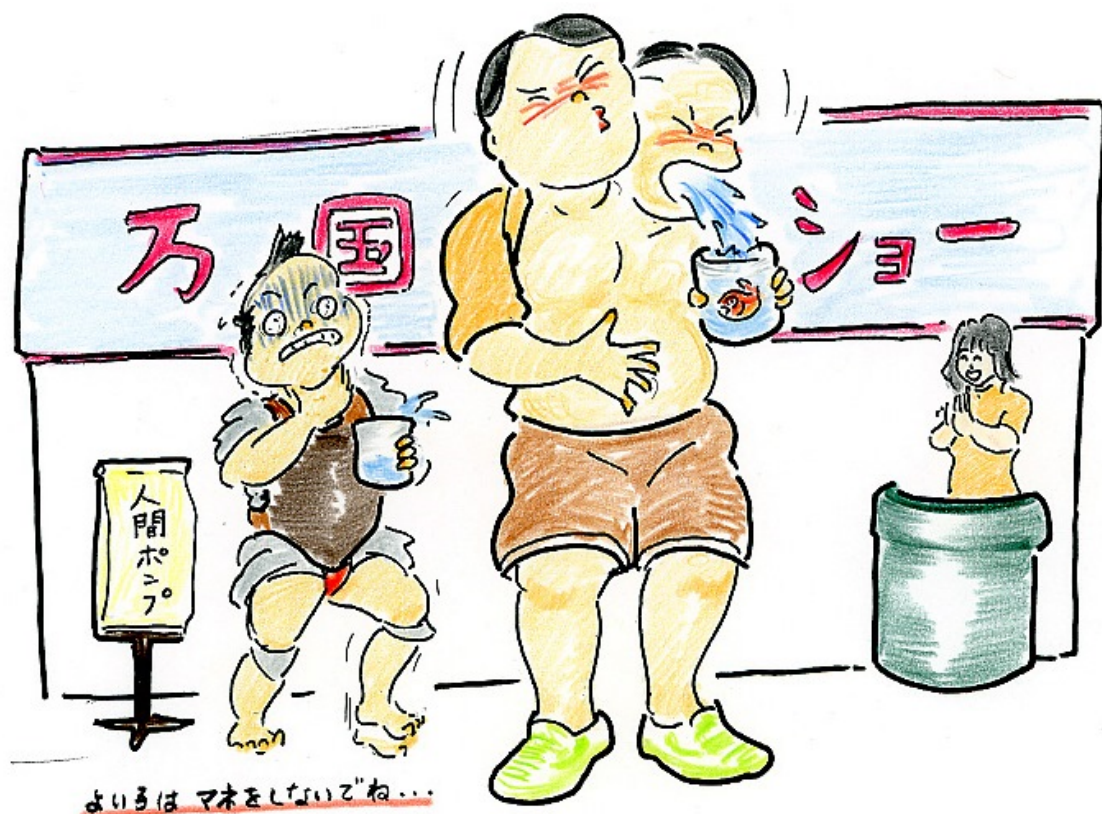
「いや鯉は強さの象徴。確かに金魚殿は綺麗じゃが弱い。」

「そんなことありゃしやせんって。この前テレビで人間ポンプってんですかい？一緒に見たじゃねえですか。」とご助は一向に引き下がらない。

「人間ポンプ？ あの一度飲み込んだ金魚殿を吐き戻すやつか？」と聞くと

「へい。食われても生きてるんですぜ金魚様は。並みの強さじゃねえですよ。」

と勝ち誇って見せたのじゃった。

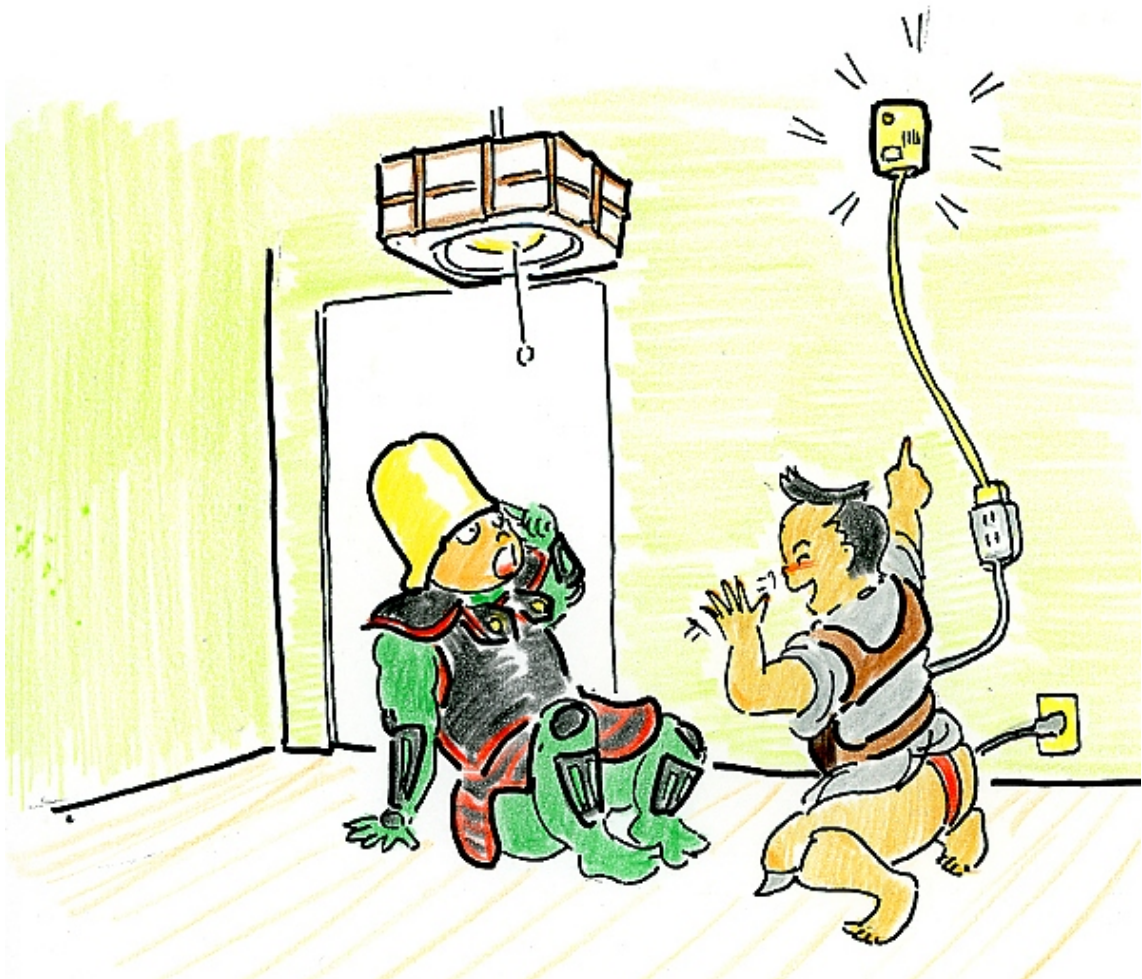


「うぬぬぬ・・・そ、それもそうじゃの。」と丸め込まれて仕方なく認めると

「でしょ！でしょ！！だから金魚のぼりを作りやしょう。ささ、カラースプレーも買ってありやすので。」と、とうとう、ご助と金魚のぼりを作ることと
なってしまったのじゃった。

「しかし気が進まんのお、またスプレーのガスが充満して爆発ってことにはならんじゃろうの？」

「へへへ、今回ばかりは大丈夫でさ。ほれ見てくだせえ。」とご助が指さす
先、番小屋の壁の天井近くには何処かで見たとような四角い器具がついておった。



「なんじゃあれは？」と拙者が尋ねるとご助は

「旦那様、ガス検知器を知らないんですかい？お屋敷で不要になったガス検知器を取り付けてみたんでさ。」と言うご助に、

「が、ガス検知器くらい知っておるわい。」と答えた拙者じゃったが・・・。

はて、お屋敷のあんな高いところに付いておったかのお・・・と自身の不明を恥じた次第じゃった。

「お屋敷のいらなくなった検知器とな？何でいらなくなったんじゃ？」と拙者が怪訝そうに聞くと

「さ、さあ。でもお屋敷の新しい検知器も天井近くに付いてますんで、あっしもあそこに付けてみましたんでさ。」と自信満々に言い切るご助に

「さ、さようか。これでガス漏れも分かるってことじゃな？」と言いくるめられたのじゃ。

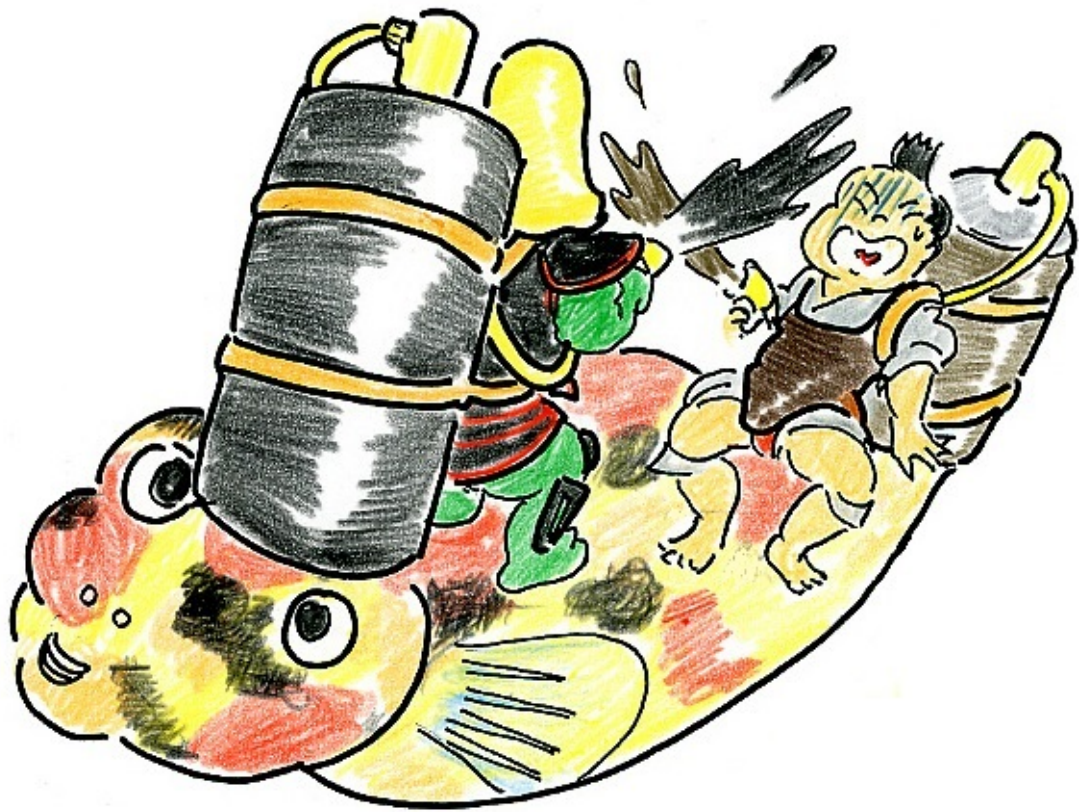
「そうでさ。これで良いんでさ。」と、ますます胸を張るご助に

「よ、よく気が付いたの。褒めてつかわす。」と拙者はしぶしぶ自分を納得させるしかなかったのじゃった。

しかし、それから半刻（1時間）後、案の定、拙者らは狭い番小屋の中、スプレーの有機ガスを大量に吸い込んでおったのじゃ。

「きゃっきゃ、きゃっきゃ。ほおれご助、くらえ、強力黒色スプレーじゃ。」

「な、なにおおなされる！あっしのは金色ですじゃ。」



「や、やったな・・・へへっ、な、何だか、又しても良い心地になってしまったの。」

「ひひひ、旦那様もですかい？あっしも何だかくらくらしてきやしたぜ。」

「ほほほ、本当に、が、ガスは大丈夫なのじゃな？」

「ひひひ、何度も言わせねえでくだせえよ。へへ、ほれ、検知器様は何も言
ってねえですぜ。で、ですが、こう暑くてはかないませんぜ。」というご助に

「ほほほ、ほれ、扇風機があったじゃろうが。」と拙者が言うと

「ひひひひ、さすが旦那様。では、こ、こうやってコンセントをおお・・・」

と、ご助がプラグをコンセントに挿し込んだ途端！



『バチッ』 と小さな火花が！！ 続いて、

『ドオオン』と大音響が番小屋中に響きわたり、

青白い閃光に包まれた拙者らの体は、お屋敷の外まで吹き飛ばされたのじゃった。



「ひいいいっ・・・お、おのれは・・・ガスは漏れておらんと言うたではないか。」と、拙者をご助を問い詰めたのじゃった。

「で、ですが、間違いなく・・・感知器は何の音も出していやせんでした。」

と弁解するご助に

「つ、付け方が間違っていたんじゃないのか？」

「な、なに言ってるんでさ。あっしはお屋敷と同じように取り付けやしたぜ。」

「ま、まて。お屋敷のガス検知器は何ガス用じゃ？」

「な、何ガス用ったって……。あっ、ま、まさか最後っ屁用だったんですかい？」

「馬鹿者、どこの世界に最後っ屁用の検知器などあるものか！LPG用か都市ガス用かと聞いたのじゃ。」



「え、LPG用と都市ガス用って何ですかい？」

「すまぬ。おのれに聞いた拙者が馬鹿じゃった。」と拙者が言うと

「て、てやんでえ。あっ、そ、そういえば旦那様にはお話ししませんでした
が、先日、主様と奥方様が今月から都市ガスに切り替えると言っておりました。」

「そ、それじゃ！」

「ど、どれですかい？」

「ええい馬鹿者が！都市ガスは空気より軽いと防火マニュアルに書いてあったじゃろうが！！」

「ひっ？・・・そ、それじゃあ」

「そうじゃ。あの古い検知器はLPG用で壁の下の方に付けてあったろうが！」

「き、記憶にございません。」

「馬鹿者が！国会答弁みたいなことを申すでない。大体がスプレーの有機ガスはボタンとかプロパンとか空気より重いガスと相場が決まっておろうが。」

「そ、そうなんですかい？」



「おっかしいと思ったのじゃ。あんな高いところに検知器を付けるなど！

ありえんじゃろうが、馬鹿者が！！」

「そ、そう馬鹿者、馬鹿者と言わねえでくだせえよ。」

と、その時じゃった・・・ピーピーピーとガス検知器が鳴り始めたのじゃった。

「あっ、危ないぞ。まだガスが漏れておる。逃げるのじゃご助。」と拙者はご

助に向け叫んだのじゃが、一向に慌てぬご助に



「な、何をしておる。早う逃げんか！」と更に叫んだのじゃが・・・

「へへへ、旦那様。こ、これはあっしの最後っ屁でさ。最後っ屁は空気より軽いから都市ガスと同じように上に溜まりましたようでさ。」と答えたのじゃった。

「お、おのれという奴は！・・・あっ、ま、まさかとは思うが、おのれは、これをやりたかったのではあるまいな！」と怒鳴る拙者に

「嫌ですよ旦那様。あっしは・・・あっしは・・・あれ？何でしたっけ？
そうそう、あっしはカワウソじゃねえですぜ。」と涼し気に答えるご助を

「カワウソではない、イタチじゃ馬鹿者が！」と、拙者は吐りつけたのでござる。

ガス検知器は正しく取りつけましょう！

金沢市民共済生活協同組合

(おわり)